
ジャパン

みづき海斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジャパン

【Nコード】

N3952M

【作者名】

みづき海斗

【あらすじ】

ジャパン・・・それは誰もが焦がれる遥か東方の国。その全ては黄金で出来ているという。西方の人々は幾度もジャパンを目指し、そしてその途中にはびこる『獣族』と『魔族』に行く手を阻まれただ誰もその地を目にした者はいない。今、2人の青年が西方からジャパンを目指して旅を始めた・・・海斗初の異世界ファンタジーです。

1・遙かなる草原の大地（前書き）

謎が謎を呼ぶ（できるだけ――¥） 短編で続く小説にしたいです。
こちらにも「蔵出し」物です。

1・遙かなる草原の大地

その草原には青く澄んだ風が吹き渡り、地に映える緑を大きく揺らしていた。

『ねえ、ルー。本当に旅に出ていいの？』

『いいさ、お前ももう17だし約束の騎士の称号も得たんだろ。』

『うん！ルーも一緒だよな。ずっと城の暮らしでルーともあまり会えなかったんだもん。』

『一緒だよ、義経。さあ、旅に出よう。』

その遊牧民たちは羊の乳で作った『ヨーク』というスープにココの実を混ぜ、特別な日には羊の肉を食べる。

遊牧民であるため、一定の地に留まる事はない。移動するときは、数30頭もある羊を率いて約半年はその場から離れる。

その移動の時期は、一族の長老 マヤイ・ラタに任されていた。術師である。

星の位置や風の向きから他の地へ移動する日を決める。

「あと3回月が巡ったらこの地を後にしよう。」

一族の長 ロト・キタイはその夜長老のテントでそう告げられた。「やはり・・・獣族が近づいているのですか？長老。」

「その通りじゃ・・・我らには日の長いうちはこの地で生活し、その代り獣族がこの地に冬を越すため来る時には、この場を獣族に渡さねばならぬ。」

それが、この遊牧民の『掟』であった。

獣族と『共存』するための。

「冬に備えての備蓄はもう出来てるのだろう？ロト・キタイ。」

『ガヤ』と呼ばれる獣族の皮で作ったテントの中には、2人以外誰もいない。ただ、小さなたき火の炎が2人の間にあるだけだった。

「日がもうない。皆に知らせるように。」

「判りました。」

ロトも空腹の為に死した獣族の皮で作ったコートを身にまとっている。

彼は長老 マヤイ・ラタに挨拶をしテントを出た。

空は満点の星空。

昼は羊の放牧に男たちは総出で行い、女性は背後の山の奥にある水を汲み、ココの実を取るとい生活がもう数千年続いていた。

伝説はもう一つあった。

その民はいつか獣族も魔族もない『約束の地』（カナン）へと辿りつくことである。誰も『伝承』でしか聞いた事はない。

ロトは自分のテントに戻ると深夜にも関わらず、娘のマリナ・キタイ、そして弟のシド・キタイが待っていた。

「長老の所に行っていたの？父さん。」

「ああ。」

ロトは頷き、羊の乳にココの実から取れた甘い汁を入れ、乳に渡した。

「もうすぐこの地を離れるの？また、あの寒い北へ移動するの？」

6歳の弟のシド・キタイが身を乗り出して言った。「僕、この方がいい。」

「駄目だよ、シド。獣族と魔族がそろそろこの地に近づいているという長老のお告げだ――従うしかない。」

そして、一口羊のミルクを飲む。

温かった。

確かに季節は冬へと移動している。

月の位置と星の位置が冬の配置になっている。

「そう・・・・・・ここが『約束の地』（カナン）なら良かったのね。」

「大丈夫、いつか見つかるさ。」

14歳のマリナにロトは父の微笑みを浮かべた。「この地を見つ

けただけでも私たち遊牧民にとっては貴重なものだ。獣族や魔族がこの地からいなくなれば、また春になれば、ここに戻って来れるさ。」

「そうね。」

マリナも羊のミルクを飲んだ。

「ところで」

と、テントには必ずある小さなたき火の向こうで、ロトは、「あの2人の客人はどうした？」

「隣にテントを用意したわ。」

マリナは微笑んで言った。「山に水を汲みに行くのは女性の勤め――」

その途中で会ってしまった獣族を倒してくれたんだもの。ミヤギは今妊娠してるから余計その『血』の臭いが獣族を呼んだんだと、義経は言っていたわ。」

「そうか――とにかく、それは良かった。ミヤギを水汲みの使いに出した私も悪いが、こうも早く獣族が近づいているとは思わなかった。」

「義経とルシフェルって西方から来たんだって。」

ロトが身を乗り出して得意気に言った。「なんか……『騎士』とかいう称号を持っていて、『ウィリアム帝王』とかいう人にも仕えたすごい人だって、ルーが言ってたよ。」

「ロト、ちゃんと『ルシフェル』と言いなさい！」

マリナは弟をしかった。「『ルー』は義経が呼ぶ時の愛称よ。私たちはちゃんと『ルシフェル』って言わなければいけないのよ。」

「はい。」

ロトは頭をかいた。

「さて、夜も遅いし今夜はもう休んだ方がいい。」

父がそう言つと、ロトは、

「そうそう、父さん！明日ね、義経が馬とか言う動物ホースに乗せてくれるんだって。あの2人が西方から連れて来たラマよりも大きな動

物だよ！」

はしゃいた。

「ロト！」

姉のマリナは弟の頭をこづき、「あなた羊を先導するラマにも乗れないくせに。早く一人前のラマ使いになりなさい。」

「んもー。お姉ちゃんは怒ってばっか。」

「亡くなったお母さんの代わりよ。一人前のラマ使いになって、いつかはこの遊牧民の長になるんだから。いつまでも夢ばっかおつてないの。」

「やっぱ、怒る。。。」

ロトは拗ねた。

「さあ、2人共早く寝なさい。明日からは『移動』の用意だ。あと3回しか月は私たちに対して時間をくれないのだから。」

「はい。」

2人は返事をし、父がたき火の炎を消すのと同時に羊の毛で作った布団の中にもぐりこんだ。

「ねえ、お姉ちゃん。」

ロトが囁く。「ルシフェルって『じよじし（叙事詩）』を書いてるんだって。『じよじし（叙事詩）』って何？」

「旅の途中であった事を詩にしてあらわす事よ。」

「そうなんだ。」

マヤの隣で眠気を催したロトの目が細くなる。「その叙事詩っていうのも聞きたいな。西方の話も聞きたいし、ジャパンの話もいっぱい聞きたい。」

「だったら、早く寝る事ね。」

マヤはロトを抱きしめた。「じゃないと、明日の仕事が出来ないわ――」

「

彼女も眠気に待てなかったらしく、また、父が帰って来たのにほっとしたのかあっという間に深い眠りに就いていった。

1 遙かなる草原の大地（後書き）

はい、新連載スタートです。4部完結の予定です。

2・義経&ルシフェル（前書き）

黄金の都『ジャパン』を目指す義経とルシフェルは緑の大地と生活を共にする遊牧民の元に『客人』として招かれた。西方からの旅の疲れを癒すほんの一時であつたが――

2・義経&ルシフェル

早朝の風は彼らにとって清しいものだった。
遙か西方からの旅、もう何か月地に足を降ろした生活をしていなかっただろう。

ターツ

義経のラマを駆る声が草原に響き渡る。

と、同時に前方で戯れてそれぞれの方向を向いていた羊^{マヤ}が一斉に同じ方向を向く。それは、義経がラマを追い集めた為。一つの集団と化した

羊^{マヤ}は義経のラマに追われる様にして前方へと走って行った。

「すごいや、義経！」

シド・キタイが目を光らせて隣の長い黒髪のルシフェルに感動を伝える。

「だって、たった先刻の事だよ。お姉ちゃんがお手本見せたの。」

「そうだね。」

黒い服に身を包んだ長身のルシフェルは少年を見降ろし、「私たちの

国にも『羊追い』はあったからね。もっとも他の国では、人や馬^{ホース}じゃなくて犬に追わせる所もあるよ。」

「そうなんだ。」

「だから、義経は簡単にラマを操れるのね。」

シドの姉、マリナ・キタイは父一族の長に代わって幼小の頃から『羊^{マヤ}追い』をしてきた。10の頃には既に一族一番の『羊^{マヤ}追い』人として男性のそれからも一目置かれていた。

「義経は飲み込みが早い。」

ルシフェルは言った。「子供の頃からそうだよ。」

「へー、そんなに長い付き合いなんだ、ルーと義経って。」
「こら！」

マリナは弟の頭を小突いた。「『客人』に向かって何て言い方するのよ。」

言っただしょ、『ルシフェル』って呼びなさいって。」

「別に気にしていないよ。」

彼は微笑して言った。そこへ、裏山の奥にある泉から水を汲んで来た

10名程の女性たちが帰ってきた。

「あら。」

その中の一人がルシフェルに気付き、頭を下げた。「お客様。」

「もういいのかい？体の方は。」

「ええ、すっかり。ルシフェル様が煎じてくれたお薬のおかげで良く眠れたし、疲れも取れましたわ。」

彼女は彼らを『客人』として招く事になった女性だった。

たまたま、その近くを通った時。

「ルー。『血』の臭いがする。」

昨日の朝の出来事である。義経は馬の歩みを止め、前方にその碧色の

瞳を向けた。「あの泉の方だ。」

それがこの遊牧民との出会いだった。

女性は木組み樽を置いて、静かにお腹を触った。

「ルシフェル様。この子はあと30回月が昇ったら生まれると長老は

おっしゃいました。」

につこりと微笑む。「この子の名付け親になって下さいませ。男の子

だったら義経様の様に雄々しく、女の子でしたらルシフェル様の様に

思慮深く、知識豊富な子に。」

「考えとくよ。」

ルシフェルは答えた。

「おい、ルー！」

遠くで義経の声がした。「お前もそんなトコで油売ってないで、『羊^{マヤ}追い』か”ココの実”集めでも手伝ったらどうなんだ？お邪魔してるんだぞ！」

「生憎。」

ルシフェルは笑顔で、「私は詩人……ここでの出来事を全て物の書に残す事に専念するよ。」

「………ったく！」

義経が舌を打つのを遠くの義経たちも判った。

「義経！」

マリナは叫んだ。「女たちの水汲みも終わったからもうすぐ

朝食よ。『追い』が終わったら帰って来てね！」

「判った！東の原で放牧したらすぐに戻るよ！」

ターツ

掛け声と共に義経はラマを一層早く走らせた。

朝食の時も好奇心旺盛な少年は義経やルシフェルを質問攻めにした。

「へー！剣？どう使うの？」

「これ？」

青い騎士の服を着た義経は腰に手をやり、「闘いの時とか、動物を狩る時とか。」

「闘い？なんで喧嘩するの？」

「今では形式的なものだよ。」

義経に代わってルシフェルが答えた。「昔は自分の土地を奪いに

来た

敵を倒すために使っていたんだけど、今はウィリアム王やその他、国々

に王がいて争い事は話し合いで済む……ただ、その時の名残として『騎士^{ナイト}』

の称号を得て王に仕える為に剣で闘いを相手に挑むだけ。」

「王さまってそんな偉いの？僕たちの長老より？」

「もう！シド、いい加減にしなさい！」

羊^{マヤ}のミルクに”ココの実”を沢山入れた朝食を取りながら、

「義経もルシフェルも食事が出来ないでしょ。」

「ねえ、マリナ。これマリナが作ったの？」

義経はそれがとても気に入ったらしく、マリナが勧める通り「おかわり」

をしたばかりである。「美味しい！俺がいた国の『ヨーグル』に似てる。」

「ええ。」

マリナは頷き、「羊^{マヤ}の乳を少し発酵させて粘りを付けた中に

”ココの実^{マヤ}”を入れるの。どっちも私たちの大切なタンパク源よ。

その代り、羊^{マヤ}は長老の許可が出た特別な日しか食べられないの。」

「ふーん。」

義経は目を丸くし、それでも食べることをやめない。

「この子はこの食事でちよつと里心が出たらしい。」

そう言い添えるルシフェルに彼は、

「お前だって「おかわり」しただろ、人の事言えるか。」

むすつと、膨れた。

「でも、どうして『ジャパン』なんかに。」

マリナは尋ねた。「私たちにも『ジャパン』は判るわ。遙か東方にある

黄金出出来た幻の王国……そこには『獣族』も『魔族』もいない。

」

「うん。」

木の茶碗を置き、義経が頷く。

「でも、そこへ辿りつくまでには『獣族』と『魔族』が大勢いる

――

行つて帰つて来た人なんていないんじゃないの？」

「じゃ、どうして『ジャパン』の伝説はあるのかな？」

ルシフェルは意味深な微笑を浮かべた。

「なんか俺さ」

義経は、「子供の頃からルシフェルに『ジャパン』の話を聞いていた

せいか――何か懐かしいんだよね。それで、ルシフェルが『騎士』の称号を得て俺たちの王 ウィリアム王の許可が出たら一緒に連れて行つて

くれるつてずっと昔からの約束だったんだ。」

「そうなの・・・」

マリナは、右手の小指を軽く噛んだ。「やっぱり、遊牧民ユミの生活じゃ物足りないのかしら。」

こちらの意味深な答え。

「別に嫌いじゃないよ、こじ。」

義経は慌てて首を振った。「広い草原に何処までも青い空。ラマで羊マヤを追う生活――俺の国と同じだよ。もつとも俺は15の時にはもう城に入っていたからそんな『自由』な生活はなかったけど。」

「『城』つて何？」

シドが尋ねる。

「石を組み立てた大きな家だよ。」

少年のあどけない質問にルシフェルは優しく答えた。「西方ではほとんど

そういう建物に人は住んでいる。また、そういう街づくりが敵の侵入を防いで

くれる――獣族や魔族のね。」

「そうなんだ・・・」

シドは少し寂しげな表情を浮かべた。「僕たちにも大きな『城』があったら

ずっとこの地に住んでいられるのに。」

「運命よ、シド。」

マリナは答えた。「誰もが皆、満足な生活を送ってる訳じゃない。だけど

どこか工夫して、『今』を平和に楽しく生きる方法を見つけて行く
――

シドももう少し大人にならなくちゃね。『ラマ使い』がちゃんと出来て、

いつかはお父さんの跡を継いでこの一族の長となるんだから。」

「そうだね！」

シドは強く頷いた。

太陽はもう空高く上がっていた。東の原に移した羊^{マヤ}たちをそろそろ水辺に移す頃である。

「教えてあげて、義経、シドにラマの扱い方を。」

「いいよ。」

「あなたたちの馬^{ホース}の世話は私がやつくから。」

と、その時、一族の長 ロト・キタイがラマを駆って東から戻って来た。

「マリナ、移動の準備は出来てるか？」

降りるなり、彼女にそう尋ねる。

「もう冬の食事・・・半年分は準備してある。冬になると羊^{マヤ}の乳の出が悪くなるし、北の血では”ココの実”も取れない。今年は出産率が

いいから、長老の許可をもらって羊^{マヤ}の肉を食糧とするしかないわね。」

「そうか。」

一族の長　マリナの父　ロト・キタイは暫く思案し、それからふいに、

義経とルシフェルに視線を移した。

「『お客人』」

穏やかな口調だった。「長老が貴方がたに会いたいを言っている。今晚長老のガヤ（テント）に来てくれないか？」

「いいですよ。」

義経は快く承諾した。「俺たちも長老に挨拶しなくちゃいけないし。」

「そう言えば、まだ長老に会ってなかったわね、義経もルシフェルも。」

マリナが言った。

「長老って・・・」

ふと、思いついたように義経が、「おばあちゃん？」

「あまり期待しない方がいいわよ。義経がナンパするタイプじゃないって」

事は私たち百も承知だから。」

「『そして義経は』おばあちゃん」と昔話をする事になった』」

「余計な事書かんでいい、ルシフェル！」

義経は自分より少し背の高いルシフェルの肘を小突いた。

2・義経&ルシフェル（後書き）

作者、遊んでいます。不定期更新です（|¥）。。。。

3・伝説（前書き）

遊牧民のもとを訪れる事になった義経とルシフェルは、長老からその遊牧の民の『伝説』を聞く。一方、翌日にはこの地をたつと知ったシドはルシフェルに西方の話をききたいとねだる。

3・伝説

「お客入、よく我が一族の者を獣族から救ってくれた。」

薄暗いガヤの中で、深夜、義経とルシフェルは長老の元を訪れていた。

「偶然です。」

義経が答えた。「こちらこそ、お世話になってしまって申し訳ありません。」

「いや、気にする事はない。」

長老は茶色い布を頭までかぶり、顔が良く見えない。

彼らの中心にあるたき火の灯りだけのせいか、それとも自らその姿を隠しているのか……

「この遊牧の民に客人は珍しい……そなたたち西方から来たと申したな。」

「はい、ウィリアム王に仕えてます。」

「あの西方一帯を治める帝国にか。」

長老はその王の名を知っているようだった。

「ご存知なんですか？」

義経は少し驚いて尋ねた。ここはもう西方から遠く離れた地。

「風の噂にだよ。」

しわがれた声で長老は答えた。「歳をとると色々なものを見たり聞いたりしてきている。かの王の名もその風の便りに聞いた事があるのだよ。」

「ところで」

義経の隣のルシフェルが、「どうしてあの険しい山へ女性が水汲みに行くのですか？」

目を細めて尋ねた。

「この遊牧の民の伝説じゃよ。」

薪をくべる長老。「その昔、この遊牧の民は500を超える民であつた。ところがある日、獣族に襲われ大勢の者が命を落とし、大勢の民が傷を負つた。」

「・・・」

「そこへ、一人の女性が山の神から『私の水を飲ませなさい。傷は驚くほど速く癒えるであろう』というお告げがあつた。そこで傷の一番軽い女性が山へ行き、お告げ通り何度も足を運んでは水を飲ませているうちに、傷を負つた者たちは命を取り戻したのだよ。」

「伝説ですね。」

義経は素直に、「それを今も守つてるんだ。」

「そうじゃよ。」

長老は義経に視線を戻しその碧色の瞳をじつと見つめ、「我々がこの地にいる時は獣族は北へ。そして幾月か廻つたら獣族がこの地へ戻る。この地をその時は我々は北へ移らねばならぬ。」

「それが獣族との共存の道ですか。」

ルシフェルが問いかける。

「そうじゃ。」

長老は答えた。「もうすぐその月が訪れる・・・旅人よ。」

「はい。」

「そなたたちも早くこの地を離れる事だな。獣族、魔族、人とは相容れぬもの故。」

「明日にもこの地を立ちます。」

義経は答えた。

たき火の向こうの長老をじつと見つめ、「俺たちには『ジャパン』へ行くという使命がありますから。」

「『ジャパン』へ行つてどうする、お客人。」

長老が問いかける。「あの地に足を踏み入れた者は誰もおらぬ。西方やこの地と同じく獣族、魔族、人が相争つてしていると聞くぞ。」

「『ジャパン』をご存じで?」

「風の噂じゃよ。」

長老はそこで大きく息を吸い、「私も年老いた。かつては『ジャパン』に行きたいという夢があった。」

「・・・」

「しかし、今はこれで十分なのだよ、義経殿。」

そのしわがれた声だけが『表情』を読み取る事ができる。「約束の地^{カナン}を目指して我らはこの広い草原を旅している。もしかしたらそなたたちの約束の地^{カナン}は『ジャパン』かもしれぬな。」

そして、最後に一言。「早くこの地を離れよ、義経殿。」

か弱く燃えるたき火の向こうで、長老はそう告げた。

「帰ってきたよ！お姉ちゃん！」

ガヤのテントの前で、ロト・キタイが待ちわびたかのように松明を振り回す。

「ただいま。」

義経はシドの頭を撫でて、「まだ、寝てなかったのか？」

「うん！」

少年は力強く月明かりの下、頷き、「だってルシフェルから西方の話聞く約束だもん。」

「シド！いい加減にしなさい！」

姉のマリナ・キタイはきつい口調で、「2人はもう疲れてるのよ、いつまでも駄々をこねないの！」

「だってー！」

「いいよ、私たちは明日にはこの地を後にしなければならないのだから。」

ルシフェルが夜風に髪を靡かせ答える。

「え、明日？」

マリナは驚いた様子で、「だってまだ・・・」

「獣族が近づいて、君たちも移動するんだろ？」

義経はマリナを見つめ、「俺たちもそろそろ旅に出なくちゃ。」

「・・・そう。」

「義経、ラマの使い方教えてくれるって言ったのに。」

「明日の朝、早起きしよう。それでいい？」

「うん！」

義経の優しい声にシドは頷き、「でも、今夜で最期なら、ルー、

お話してね。」

「いいよ。」

ルシフェルは心強く頷いた。

マリナたちのガヤの中で。

「アーサー王の話をしよう。」

ルシフェルは笑みを浮かべ、優しく言った。「ウーゼル王が亡くなり、後継者がいなかったために争いが起こったが、ある時、カンタベリー寺院に、剣が刺さっている不思議な石が現れる。その剣には、『この石から剣を抜いた者は全イングランドの王である』と書かれていて、イングランド中の王や領主や騎士たちが剣を抜こうとするが、誰にも抜くことができなかった。その頃、15歳のアーサーは兄ケイ卿の従者として騎士見習いをしていたが、馬上試合で剣を持って来るのを忘れた兄のために宿へ戻る途中、その「石に刺さった剣」を見つけ、何気なくその剣を抜いたんだ。魔女マーリンはアーサーの父親がウーゼル王であることを明らかにする。こうしてアーサーは即位したけど、即位に反対する王や諸侯との内戦が始まったんだ。反対勢力の中心であったのは、オークニーとロージアン王、ロットだが、彼の妃モルゴースはアーサーの異父姉でもあったんだ。戦は長く続いたが、アーサーはマーリンの助言とベンウィックのバン王たちの協力を得て勝利を収める。その後も、内外の戦乱を数多く勝ち抜き、特にブリテン島にとって脅威であったアングロ・サクソン人を壊滅的にうち破ってからは、平和な一時代を築きあげたんだ。彼の王国は『ログレス』、都は『キャメロット』と呼ばれたと言われている。」

そこでルシフェルは一呼吸置き、

「眠くないかい？明日は早起きだぞ。」

シドに尋ねると、

「大丈夫！1晩くらい寝なくたって平気だよ。」

「今、ラマのミルク作るわね、義経、ルシフェル。」

マリナがそう言つと、

「ありがとう、マリナ。」

義経は微笑んだ。「俺、それ凄く気に入っているんだ。」

「そう！」

嬉しげにマリナが答える。

天空には満月。

ルシフェルの『問わず語り』は続く……

「ある時、剣を折ったアーサーは、マーリンに導かれ、ある湖を訪れたんだ。不思議なことにその湖面から、白い衣をまとった女性の腕が突き出ていて、そしてその腕はひとりの剣を握っていた。

その剣はエクスカリバー。アーサーはエクスカリバーを湖の貴婦人から譲り受け、生涯その身に帯びることになるんだ。また、エクスカリバーの鞘は、身につけている限り、どんな傷を負っても一滴の血も流れないという魔力を持っていたらしい。」

そこで、シドは、

「ねえ、そのマーリンとか言う人、魔族なの？」

「さてね。」

ルシフェルは髪をかき上げ、「伝説だからね。」

「続きは？ルー！」

「こらっ！ちゃんと『ルシフェル』って呼ぶの！」

マリナの怒る声が飛ぶ。

義経は笑った。

「最後の話だよ、シド。」

ルシフェルはラマのミルクを受け取りながら、「これを聞いたら寝るんだよ。」

「うん！」

シドは元気に答えた。

よっぽどこの手の話が好きらしい。

それとも、見たこともない世界に興味を持つ年頃なのか。

「アーサー王とモードレッド両軍の最初の戦で、ガウエインが命を落とす。ガウエインは死の床で、ランスロットに謝罪と、王への助力を願う手紙を書いたんだ。アーサーとモードレッドの戦が続く中、ある時、アーサーがまどろんでいると、その夢の中に死んだはずのガウエインが現れ、『和睦を申し入れて戦を中断し、ランスロットの援軍を待つように』と告げたんだ。しかしその和睦は成功せず、最後の激しい戦いが始まってしまふ。両軍の死骸が累々と横たわる中で、アーサーはモードレッドを殺すけど、モードレッドが振り下ろした剣で瀕死の重傷を負うんだ。アーサー王は自分の傷の重さを知り、側近のペディヴィアにエクスカリバーを湖に投げ入れるように頼んだ。湖に剣が投げ込まれると、水中から腕が現れて剣を受け止め、三度振ってから、再び、剣と共に水中へ沈んだ。アーサーはペディヴィアとともに水辺に降りていくと、そこに一艘の舟があり、その中には3人の貴婦人がいたんだ。その貴婦人のひとりには、アーサー王の姉モーガンで、アーサーの頭を自分の膝へ乗せながら『弟よ、どうしてなかなか私の所へ来なかったのですか？頭の傷がすっかり冷えてしまっています』と嘆く。アーサーは、ペディヴィアに『私はアヴァロンへ傷を癒しに行く』と言い残し、アーサーを乗せた舟は湖の彼方へ去っていき、やがて見えなくなったんだ。」

「何処へ行ったの？そのアーサー王は。」

シドが尋ねる。

「さあね、それは私には判らないよ。私はしがない詩人だからね。」

「ルシフェルがたき火の向こうで答える。」

「それで最後？」

「ちよつとだけエピローグがあるけどね――アーサーが去つたのち、グウィネヴィアは尼僧となり、そのことを知ったランスロットも俗世を捨てて神に仕える生活を送つたんだ。アーサー王が本当に死んだのか、あるいはアヴァロンへ旅立つたのかは誰にも解らないが、グラストンベリ修道院に遺されていたというアーサーの墓にはこう刻まれていたと言われていたというよ。」

『ここに、過去の王にして未来の王アーサーは眠る。』

「ふーん。」

「不思議な話ね。」

シドと同じく、マリナもいつの間にかルシフェルの物語に夢中になつてしまつたらしい。

「きつと旅に出たのよ。」

彼女は言った。「それほど偉大な王がそう簡単に死ぬわけないわ。」

「そうだよ、俺たちの民だってあの伝説の通り、裏の山の水で皆傷を癒したんだから。」

「あの長老の言つていた、伝説だね。」

義経は言つた。

「そうよ。」

マリナは笑つて言つた。「だから、あの山へ水を汲みに行くのは昔からその女性の勇気を称えて女性なんだから。」

「そうだね。」

義経は答えた。「さ。明日に備えて、皆寝よう。」

「それがいい。」

ルシフェルも同意する。「隣のガヤへ帰るよ、シド、マリナ。」

「おやすみなさい！」

「おやすみー！」

何故か。

今夜は、父　ロト・キタイの姿がこのガヤにはない。
少し疑問に思った義経だが――

2人はキタイ家族のガヤを後にしようと立ちあがった。
ガヤから出る間際、

「何かあったら、私たちを呼びなさい。」

意味有り気に――紅の瞳を肩越しにシドとマリナへ向けルシフ
エルは言った。

深夜。

満月が天空を支配する時。

義経がふいに、目を覚ました。

「!・・・・・・」

良く澄んだ、闇の中でも煌めく碧眼で周囲を見回す。

『普通』のものなら気付かないであろう――

その『香』の臭いに。

「ルシフェル!」

素早く剣を取り、傍らの友人に声をかける。

が、既にルシフェルは彼らのガヤの入り口に立っていた。

「判ったのか? ルー。」

立ち上がり、彼に寄り添う。「俺だけかと思った。」

「判るさ。」

ルシフェルは微笑し、義経を振り返った。「これは『獣寄せ』の『
香』だ。」

「ああ・・・・・・」

義経は頷いた。「あの長老、明日にも獣族が来るとか言っていた

のに、

何で逆に『獣寄せ』の『香』を使うんだ――魔族に襲われた人たちが

『獣寄せ』の『香』を使って『互い打ち』させるっていう手で使う事はあるけど。」

「どうやら、それが目的ではないようだよ、義経。」
ルシフェルは闇に目を細めた。

満月が、眩しい――

「あの伝説。」
ルシフェルは言った。「まんざら嘘でもなさそうだ。何か裏がある。」

「ルーはマリナたちを守って！」
彼の言葉を聞き終える前に、義経は長老のガヤ目指して暗い草原を走っていた。

「長老がおかしい、俺、見てくる！」
軽く地を蹴ると、義経は天空高く飛び上がった。

「気を付けろ、義経。」
ルシフェルが声をかける。「ただ者じゃないぞ、あいつ。」
苦々しい口調だった。

3・伝説（後書き）

忘れていたわけではありません・・・（――）
また、「次話投稿」になっちゃった（爆死）

4・最終話／約束の地（カナン） 前半（前書き）

遊牧の民のもとで暫しの休息をとっていた義経とルシフェル。「間もなく獣族がこの地へ来る」という長老の言葉とこの民の間にある『伝説』。そこには、民の隠された『事実』があつた。

『ジャパン』最終話 前半です。

4・最終話／約束の地（カナン） 前半

その闇には獣族特有の碧色の瞳が無数煌めいていた。

「そこを、どけ！」

義経は地を蹴り、天空高く舞い上がった。
腰に鞘から取り出した剣を頭上に掲げる。

ウォーン

その剣に反応したかの様に、地上の獣族たちは義経の後を追い、同じく地を蹴った。

剣の刃を逆にし、彼は次々と獣族たちを地上へと落としていった。

「この地へ獣族が来るには早すぎる。」

義経は呟き、目を細めた。

その視界に。

見慣れた男性の姿があった。

この遊牧の民を率いる一族の長　ロト・キタイであった。

「何！？」

義経は彼の攻撃を身を翻してかわし、再びロト・キタイの姿を追った。確かにマリナ・キタイとシド・キタイの父　ロト・キタイである。しかし、その容貌は獣族そのもの……

「一体、どうなってるんだ。」

義経は呟き、長老のガヤへと向かった。「この民は……」

┐

その頃、ルシフェルはマリナとシドがいるはずのガヤへと入った。
松明の小さな灯が一つ。

「マリナ・キタイ、シド・キタイ。」

ガヤの薄暗闇の中でルシフェルは静かに声をかけた。

「ルー？」

シドの微かな声が聞こえた。

「いるのかい？シド。」

ルシフェルはその方向へと足を進めた。

そのガヤにも長老がたいた『獣族寄せ』の『香』が満ちていた。

彼は目を細めた。

その先には二対の碧色の瞳。

「どうしたんだい、マリナ・キタイ。」

彼がそう問いかけると、

「急に」

マリナは語り始めた。「皆が暴れ始めたの。この変な香りをかいでから――お父さんもよ。」

その瞳は碧。

「そう。」

ルシフェルは頷き、ガヤの奥で抱き合う2人に手を差し伸べた。

「こっちへおいで。もう怖くはないから。」

外では激しい獣族の雄叫びが聞こえる。

「おいで。」

ルシフェルは重ねて言った。

「ルシフェル……。」

シドを抱いたマリナは静かに黒い服を身にまとった彼の元へと歩み寄った。

が、

ウオーン

ふいに、2人はルシフェルに向かって牙を向け飛びかかっていった。

彼方に獣族の雄叫びを聴きながら、義経は長老のガヤへと入った。空には満月――その隙間から忍び込む月明かりだけがガヤ内で

の灯だった。

人影も松明もない。

「・・・・・・・・」

義経は剣を構え直すと、奥へと入って行った。足下の草が微かな音を立てる。

「待っていたよ。」

暗闇の奥から声がした。

長老のものである。

そのガヤも強い『獣寄せ』の『香』に満ちていた。

「待っていたよ、獣王。」

しわがれた声の持ち主は確かに長老のもの。

「どうしてこんな事をした。」

碧色の目を細めて義経は暗闇に向かって問いかけた。「この民を獣族にしたのは、お前だな。」

「仕方のない事だったのだよ。」

長老は答えた。「民を守るのが私のつとめ――そのためにはどうしても仕方なかった。より濃い血を求めるために、お前たちを呼び寄せたのも。」

そして、違う口調が後に続く。「早くこの地を去るがいい、旅人よ。」

「・・・・・・・・お前は」

そう呟いた時、義経の目の前で強い閃光が放たれた。

「！・・・・・・・・」

義経は両目を押さえ、地に両膝を付いた。

「獣玉・・・・・・・・！」

一言呟き、地に伏せる。

「そう獣玉だよ。獣族を追い払う時に使う光の玉さ。」

今は光に満ちたガヤの奥で、長老が告げた。

「だからお前は来るべきではなかったのだよ。」

「だから、お前を呼んだのさ、獣王。」

二つの声が入り混じる。

「獣王なんか」

掠れる声で義経は言った。「獣王なんか俺は知らない。」

「お前が知らなくとも、その血が知っているのさ。」

皺がれた声だけが、ガヤに響く。

そして、その光の中、もう一つの煌めきが義経の頭上に長老によって翳された。

剣。

その刹那。

『風』がガヤに舞い込んだ。

「渡さないよ、この子は。」

義経に翳された剣を片手で受け止め、『風』は言った。「この子は私のものだよ。」

紅の瞳。

ルシフェルだった。

カシャン・・・

片手で剣を彼方へ投げ飛ばし、ルシフェルは長老と義経との間に立った。

「・・・お前は」

茶色いコートを頭まで纏った長老が微かな驚きの声で、「魔王・

瞬間。

瞬間。

ルシフェルは長老のコートを脱ぎ取った。

バツ・・・

「見ないで！」

「助けて！」

絡みあう二つの声――茶色のコートの下には何もなかった。

「・・・・・・そう言う事。」

ルシフェルが呟く。

獣玉の光は次第に闇におさまっていった。

「ルシフェル？」

ややあつて、足下の義経が彼に声をかけた。

「目をやられたようだね。」

ルシフェルが片膝を付き、「大丈夫かい？」

静かに尋ねた。

「大丈夫。」

義経は目をこすりながら、立ち上がり、

「ルシフェル。お前ももう判っただろう。」

「ああ。」

2人は立ちあがった。

この民全員にまかれた『獣寄せ』の『香』と、間もなく獣族がこの地に訪れるという長老の言葉。

それらが、彼らの中で一つに繋がった。

真実はコートの下に『なにも無い』長老の姿――

「行こう、ルー。」

義経は言った。「マリナたちが言っていたあの山へ。」

そこには『伝説』の謎を解く何かがある。

月は――妖しい光を放っていた。

4 ・最終話、約束の地（カナン） 前半（後書き）

・・・スランプです。後半は何とか今月中に（滝汗）

5・最終話「約束の地（カナン）後半（前書き）

そして今、遊牧の民の『伝説』が明らかとなる。

5・最終話／約束の地（カナン）後半

白い谷と緑の森をぬけると、その湖はあった。何処までも透明で、静かな場所。

「ルー。」

義経はそこで歩みを止め、傍らのルシフェルに声をかけた。「ここだな。あの伝説の湖は。」

「その様だね。」

ルシフェルは涼しげな声で答えた。

空にはもうすぐ朝日が昇る。

義経はその湖に足を入れ、湖の一番奥にある小さな滝へと向かった。

ルシフェルもそれに続く。

そして。

声が聞こえて来た。

「待っていたよ、旅人よ。」

あの長老の皺がれた声と重なっていたよく澄んだ女性の声だった。

「・・・・・・」

水しぶきを浴びながら、義経はその滝の奥へと入った。

パシャン・・・・・・

そこには氷壁があった。

冷たくて、暗い・・・・そして、その声の主はそこにいた。

「お前が伝説の女性か？」

義経は尋ねた。

すると、奥の方から、

「そうよ。」

声に戻って来た。「私はずっと私の民を愛して来たわ。」

「その結果がこれかい？」

ルシフェルが静かに、「獣族の血を得る事によって命を取り戻し、そして尚、その遊牧の民の中に獣族の血を与え続けて来た。」

義経がそれに続く。

「長老――お前は獣族が間もなくこの地に来ると言っていたけど、本当は民の中の獣族の血が甦る時が来るのを予測していたのだろっ？」

「その通り。」

女性の声は答えた。「あの日、獣族が襲って来て民のほとんどが深い傷をおってしまった・・・。。。だけど、獣王はこの湖に私を呼び民を助ける約束をしてくれた。」

「それが、獣族との契約か。」

ルシフェルが目を細めて答える。

「ええ。」

彼女が答える。「確かに獣王の血で人々の命は助かった。そして、それからはずっと私が獣王の血の代わりに私の中に流れる獣王の血を民に与え続けて――そして時が流れた。」

「そういう事。」

義経はそう言い、女性の声の方向に近づいて行つた。「獣王がこの民を一族に率いれた訳か。」

そこには、一人の女性の――ミイラ。

左手首は湖の源泉となる泉に差し伸べたまま。

「・・・・・・」

「これが真実よ。」

声はもうその女性のミイラから聞こえてくるのか、洞窟そのものが喋っているのかは判らなくなっていた。

「・・・。。。もう終わりにしなくちゃね。」

優しく、義経は女性に言った。「お前の血を欲せずとも民は生きていける。今まで通り月が幾度か廻れば『獣寄せ』の『香』がなくとも獣族として幾月かを過ごす――いや、『獣寄せ』の『香』が

なければずっと人として命が尽きるまでこの地にすることが出来るだろう。」

「・・・そうなの？」

女性は言った。

「そうだよ。」

ルシフェルが答える。冷たい氷壁の様に静かな声で。「もう、君の役目は終わったんだ。」

「そう・・・」

女性・・・ミイラは溜息を付いた。「もう私はこの湖に『命』を捧げなくていいの？」

「そうだよ。」

義経が答える。

「もう誰も失わなくていいのね。」

「そうだよ、長老。」

「だったら、せめて」

ミイラに若い黒髪の女性の姿が浮かび上がった。「獣王・・・あなたの手で私を葬って。」

「俺は獣王なんかじゃないけど」

義経は静かに腰の鞘から剣を抜いた。「お前が楽に・・・かつての民の所へ還れるのなら。」

「そうして、義経。」

女性の言葉と同時に。

カシャ・・・ン

銀色に煌めく義経の剣はミイラに向けて振り下ろされていた。

陽^ひが昇った。

この緑の大地に再び朝が来た。

「昨日、獣族を倒してくれたのは、義経とルシフェルなんだね。」

シドが黒い目を輝かせて言う。

「違うよ。」

義経は首を振り、「シドたちを救ったのは長老だよ。」

「え？」

マリナは目を丸くした。「長老が……。」

「その通り。」

朝の涼やかな風に長い髪を靡かせながら、ルシフェルは、「今、君たちのお父さんが弔いの用意をしている……今度は君たちのお父さん、ロト・キタイが一族の長老となり、シド、君が一族を率いていかなければならないんだよ。」

「……。」

シドは黙りこくった。まだ、6歳である。

「そんなに急な話じゃないよ。」

義経は微笑し、「君が一人前のラマ使いになるまで一族の長は、マヤ、君が率いるんだ。」

姉さんを助けて、一人前のラマ使いになった時に本当の一族の長になるんだよ、シド。」

「……そう。」

シドは答えた。そしてしっかりと頷き、

「俺、立派な長になる。だから、ラマ使いになる事も忘れないよ！」

「そうだね。」

義経は答え、大地の果てに聳えるこの民の女性たちが水を汲みに行っていた山に視線を移し、「あの山の頂上に太陽が移ったら、俺たちはこの地を後にするよ。」

「義経……。」

マリナが暗い表情で答えた。「行ってしまうのね。」

「ああ。」

義経は頷き、「俺にはジャパンへ行く夢がある。」

「君たちはもうここで手に入れたんだよ。」

ルシフェルが後を繋ぐ。「ここが君たちの『約束の地』^{カナシ}だよ。」

サーツ………と風が流れた。

そして。

山の上に陽^ひが昇る頃、2つの馬と2つのラマ^{ホース}が草原を走っていた。義経たちを見送る、マリナ・キタイとシド・キタだった。

「ありがとう、義経！」

シドは叫んだ。笑みを顔いっぱい^ひに浮かべ。

義経とルシフェルは軽く振り返っただけだった。

緑の草原は何処までも広がる……

ジャパンへ。

ジャパンへ……

若き青年たちの旅は続く。

5・最終話〈約束の地（カナン）後半（後書き）

終わった……（―¥）。。。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3952m/>

ジャパン

2010年10月10日17時44分発行